

服 を め ぐ る

KCI 公益財団法人京都服飾文化研究財団 広報誌
衣服の
研究現場より



10

TAKE FREE

KCI 40th
Anniversary

表紙の収蔵品



ヴィジット

1890年頃 フランス製 京都服飾文化研究財団所蔵
リチャード・ホートン撮影

オフ・ホワイトのカシミア・ツイル製。繊細で豪華な鳥の羽根飾りが衿や前の打ち合わせ、後ろスリットにつく。また、多色の絹糸で織り出された日本のモチーフである兜、檜扇、蝶、しだれ桜といった文様は、当時、欧米を中心に日本趣味が流行していたことを物語っている。ヴィジットとは昼用コートの一種で1870年代から90年代の欧州で流行した。

表紙のイラスト | Ryuto Miyake

海外の古いフィールドガイドに影響を受けた作風で、書籍、広告などへイラストを提供するほか、グラフィックデザイナーとしても活動する。最近の仕事に『POPEYE (ニューヨーク特集)』や『デザインひきだし』の表紙など。 www.ryutomiyake.com

服をめぐる10

一人一品

長見佳祐(ファッション・デザイナー)
インタビュ「新しい服作りへの思考」

p4

KCI Wunderkammer
扇

p12

地産街道を行く⑩
長浜 浜ちりめん

p14

今日の補修室 第10回
レプリカ(複製品)の製作①

p20

KCI 40周年特別企画

わたしが選ぶKCI名品

p22

KCI活動報告

p24

本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団(KCI)が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

京都服飾文化研究財団(KCI)とは

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称 KCI)は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会(「モードのジャポニスム」展、「身体」展、「FUTURE BEAUTY: 日本ファッションの30年」展など)や、研究誌(『DRESSSTUDY』、『Fashion Talks...』)の発行を通じて公開しています。
Website <http://www.kci.or.jp/>



「華麗な革命」展 パリ服飾芸術美術館(1991-92年) ©The Kyoto Costume Institute, photo by Naoya Hatakeyama

HATRA 長見佳祐

Keisuke Nagami

著名人が各々の目を通し、KCIの收藏品を語る「一人一品」。
今回のゲストはファッション・デザイナーの長見佳祐^{ながみけいすけ}さんです。

長見さんは1987年、広島県生まれ。2006年にフランスに渡り、170年以上の歴史を誇るファッション教育機関「エスモード」パリ校で、クチュール（主にレディース服を作る仕立て）の技術を学ばれました。卒業後は、パリでマルティース・シットボンやアン・ヴァレリー・アッシュなどのデザイナーのもとで研鑽を積みました。

帰国後の2010年、自らのブランド「HATRA（ハトラ）」を設立されます。ユニセックスウェアブランドのHATRAは「部屋」を主題に、ネット社会の新しい環境に適した、居心地の良い服作りを提案しています。長見さんはこのHATRAで服の制作に携わる一方、「Future Beauty：日本ファッションの未来性」（2012年、東京都現代美術館）や「JAPANORAMA」（2017年、ホンビノス・センター・メッセ）などの展覧会への作品出展、異業種とのコラボレーションなどに積極的に関わっていらっしゃいます。服の制作に並々ならぬ情熱を持つ長見さん。そんな長見さんが選んだKCI收藏品は、1987年にアズデン・アライアが発表したドレス。今回はこのアライアのドレスを軸に、長見さんにファッションや服の制作についてお話をうかがいました。



新しい服作りへの思考

—アライアと「HATRA」デザイナー長見佳祐の挑戦

アライア—尊敬されたデザイナー

京都服飾文化研究財団(以下KCI)は、本日はお忙しい中お越しくださいましてありがとうございます。長見さんとは、KCIが2012年に東京都現代美術館で開催した展覧会「Future Beauty」で、日本ファッションの未来性」で、「HATRA(ハトラ)」の作品を出展してくださってからのお付き合いになります。本日は、長見さんを選んでいただいたKCIの収蔵品を中心に、いろいろなお話をうかがえればと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

長見…よろしくお願ひします。

KCI…今回、長見さんが選ばれた作品は、アズディン・アライア [Azidine

Alia, 1940-2017] が1987年秋冬に発表したウール・ジャージー製のドレスです。アライアは1980年代にパリで活躍したデザイナーで、体のラインにびつたり沿ったドレスが作風として挙げられます。実は、長見さんがこの作品を選ばれたのは意外でした。というのも、長見さんが作っていらつしやる服は、ゆつたりとリラックスした印象のものが多く、アライアのタイトなドレスとは相いれない感じがしたからです。なぜこのドレスを選ばれたのでしょうか？

長見…そうですね。布と身体の間隔という意味では、僕が作っている服とアライアの服とでは大きなギャップを感じられるかもしれませんが、その距離への洞察という点では、学ぶべきものが多くあると感じています。まがりなりに身体と服の関係に向き合ってきた身として、アラ

イアはいつも意識のどこかに存在していたデザイナーでした。また、一制作者として、自身が手を動かし、制作を一貫して手がけていたクチュリエ、アライアの作品に触れてみたいと思ったので、この作品を選出しました。

KCI…長見さんは2006年から2009年までパリのファッション専門教育機関「エスマード」で服作りを学び、2010年までパリの服飾ブランドで研鑽を積まれたということですが、当時パリで服に携わっているお仲間のなかで、アライアというデザイナーはどういう存在でしたか？

長見…ある種別格の、誰もが尊敬するデザイナーでした。直接の話題にのぼらなくても、話の端々にアライアの功績に対する敬意が漂うような、そんな存在です。



長見さんが選んだ一品

アズディン・アライア

ドレス 1987年 京都服飾文化研究財団所蔵 畠山崇撮影

モス・グリーン of ウール・ジャージー製ワンピース・ドレス。チュニジア生まれのアライアは美術学校で彫刻を学び、ディオールやギ・ラロッシュ、ミュグラーのもとで働いた後、パリで自らのブランドを立ち上げた。独自の裁断方法による身体にフィットする服は、1980年代の「ボディ・コンシャス」なファッションを力強くリードした。本品は伸縮性の高い柔らかなウール・ジャージーが使われ、身体に無理なく沿わせるために細かなパーツで構成されている。女性の身体の動きや曲線の美しさを引き立てるアライアならではの卓抜した服作りの技術が冴える作品である。

KCI…先ほど「アライアはいつも意識のどこかに存在していたデザイナー」とおっしゃいましたが、長見さんにとって、アライアはどんなデザイナーですか？

長見…そうですね。カッティングや縫製技術に服作りの大きな体系があるとしたら、小さいけれど別の体系を持つていたデザイナーといえるでしょうか。メインストリートの少し脇で純度の高い、独自の体系を構築しているイメージです。今こうして僕たちが多彩なファッションを受け入れることができるのは、アライアをはじめとする服作りの巨人たちが、ファッションの体系を外側へと広げてくれたからだと思います。

KCI…なるほど。服作りの世界を押し広げたデザイナーと捉えていらつしやるのですね。その辺りの詳しいお話を実際のアライアの作品を見ながらおうかがいしたいと思います。

女性の尊厳や崇高さを表わす服

KCI…実物からはどういう印象を受け

ましたか。

長見…そうですね。クラシックな人体観を彼の視点から鋭く見直しているような印象を受けました。例えば、カッティングを見てみると、構造的に有効な切り替え線（生地のパーツを縫い合わせた線）がある一方、それと見分けがつかないような巧妙に、構造にはあまり貢献していない切り替え線が据えられており、それらのバランスがスタイルを新鮮な形に矯正しています。

KCI…従来の服作りの方法を逸脱しようとしているということでしょうか？

長見…そのところは作り手にしかわかりませんが、従来の方法に反発したというよりも、アライアの揺るぎない女性像をもとに、自然とこうした独自の規律が生まれていったのかなと感じました。

KCI…では、王道に反してやろうというのではなく、布を置いた時にここに切り替え線やダーツ（平面的な生地を立体化する技法。生地の一部をつまんで縫い消したつまみのこと）があると美しいよね、という感覚でしょうか。

長見…そうですね。女性を美しく見せるためのシンプルで深い思案の結果であるように思えます。

KCI…アライアは体に生地を置いて、曲線を見るだけではなく、動きまで計算してデザインしていたと言われていますが、そういうのは作品から読み取れますか？

長見…スカートの微妙に非対称なカッティングになっていきますよね。なぜこうしたのかはつきりとは分かりませんが、もしかししたら、素材がニットなので、地の目によってフレアの動き方が変わることを見算してこうしたのかなと。一見シンメトリーに見えるだけに、そうした狙いを感じます。

KCI…裏側の処理の仕方にも、そういうものが現れていますか。今回はKCIが所蔵する他のアライア作品の裏側もご覧いただきましたが。

長見…そうですね、裏からも一貫した態度を感じますが、面白いのが、捨てるときは結構大胆に捨てているところです。

KCI…縫い代をあまり残していない？

長見…はい。それは、女性が着たときの状態を優先して、プロダクトとしての見え方を下位に置いているからだと思うんです。強度や製品映えなどの一般的な価値を優先せず、まず女性が美しく見えるようにという配慮が全体から伝わってきます。

KCI…「それまでの服作りのメインストリームとは別の体系を持つていたデザイナー」という所以ですね。

長見…女性の尊厳とか崇高さを第一に考えて作る、アライアの服作りにそうした規範があるとなれば、現代の服作りとは別の宇宙が存在しているなと強く感じます。

モノづくりに根差したデザイン

KCI…最近の長見さんの活動を教えてくださいませんか。

長見…最近、コンピューター上での縫



(右・左ともに) HATRA 2018年秋冬 ©HATRA



製シミュレーションにチャレンジしています。CADの型紙データを別のソフトに取り込み、ミシンの代わりに前脇線と後脇線の縫い合わせ情報を紐づけて、次は肩を、袖を、という具合に設定すると、3Dアニメーションで縫合が再現され、ボディの上で仮想の服が縫いあがります。丈を長くしたい時は、型紙の裾線を下に延長すれば、リアルタイムで着丈の変化を確認できます。生地、重なり、風の流れも設定できるんです。

KCI…縫製のプロセスをデータ化するってことですね。これまで、実際に生地で作作をしていたのが、あつという間にパソコン上で試作ができる。先ほどアライアの作品と一緒に見て、生地選び、カッティング、縫製など彼なりのアプローチが見えました。今後、もつと別の体系が現れそうですね。

長見…はい。さらに言えば、

ファッション的なマインドが多様なかたちで拡張されていく将来、こうして新しい道具と関わることで、ファッションの土台となってきた布や既存の人体観への考え方が大きく変わっていくだろうなと感じています。

KCI…大学との協業も予定されているとか。

長見…東京工業大学の環境・社会理工学 院融合理工学系の研究室から講演依頼をいただきました。科学技術と社会、アートやデザインとの関係を「翻訳」を通して深めていく学問だと聞いて、今後より深まっていくであろうファッションと科学の関係について、多くの個人的な視点をきっかけに議論を進められればと思っています。

KCI…先ほどの3Dの縫製シミュレーションにチャレンジしているのも、それと関係あるんでしょうか。

長見…まだどのような関係が築けるかは未知数ですが、単にアイデアを持ち込むだけではなく、アライアのように、実際に手を動かしてモノづくりに携わりた

アズディン・アライアの逝去を伝える新聞、雑誌。80年代のファッションをけん引し、数々の名品を世に送り出した功績に大きな賛辞が送られ、その死を悼んだ。ファッション関係者をはじめ世界中の人々から愛されたアライアは、2017年11月18日に77年の生涯を閉じた。



いんです。その中で、お互いの領域を橋渡しする一つの手段として3Dの縫製シミュレーションもあるかなと。これまでブラックボックスとされてきた感性の部分をすこしずつ紐解いていくことで、他分野との交わりが生まれ、ファッションに現代的な奥行きが生まれると信じています。

名品を見る意味

KCI…今日は長見さんにアライアの作品をご覧いただき、いろいろなお話をうかがうことができました。最後に、過去の作品を見ることとご自身の服作りとの関係について教えていただけますか。

長見…毎日こちらでお勤めされているKCIのスタッフさんと感覚は違うかもしれないんですけど、「この場所で所蔵品を見た」という経験には、いつも深く勇気づけられています。縫い目がどうか、見慣れないシエイプだとか、そうした発見ももちろん貴重なことですが、なにより、服飾の歴史を圧縮したようなこの場所で、偉大なアーカイヴと同じ空気を共にした、という実感は何ものにも代えがたいものです。そういう経験を通して得たものを「HATRA」に持ち帰り、自分が服を作る意味を、毎日問いなおしていければと思っています。

KCI…本日はどうもありがとうございました。



扇

素材：象牙
原産地：中国
製作年：1800年頃

空調のないところで暑さをしのぐには扇が役立つ。折りたたみ式のものにはコンパクトに納まり持ち運びやすい。日本生まれの折りたたみ式扇は平安時代末期に中国へ伝わり、15～16世紀頃にヨーロッパにもたらされた。18世紀にはフランス宮廷を中心に、装いを完成するアクセサリとして大流行。べっ甲や真珠貝といった高価で稀少な素材で作られた扇が華やかさを競った。本品もそのひとつ。象牙に繊細な透かし彫り細工が施され、小さな衝撃でも細工が折れてしまうほど。パタパタとあおぐどころか、折りたたみを開くことすら恐る恐る…の極上の品である。(筒井)



©The Kyoto Costume Institute.
photo by Toru Kogure

珍品奇品も数多いKCIの収蔵庫

—そこはまさに「驚異の部屋」。



KCI 収蔵品

森英恵 (もりはなえ)
ドレス
1966年秋冬
京都服飾文化研究財団所蔵
金井純氏寄贈、島山崇撮影

朱色の絹縮緬にダリア柄を捺染したワンピース・ドレス。シボの高い縮緬が使用されており、高級な着物の雰囲気醸し出している。1951年、新宿に洋裁店「ひよしや」を開いた森英恵 [1926-] は映画衣装を手掛けるなどして名声を高め、54年に銀座に「ハナエ・モリ」を開店。65年、ニューヨーク・コレクションで作品を発表。縮緬、紬、帯地といった日本の伝統的な生地を使い、高い評価を受けた。77年にはアジア人として初めてフランス・オートクチュール協会に会員として認められ、パリ・オートクチュール・コレクションに初参加した。



ドレスの衿元。
細かいシボが豊かな陰影を作る。

地産街道を行く ⑩

KCIの収蔵品にみられる技法や素材を手がかりに、各地を訪れます。

長浜 (滋賀) 浜ちりめん



浜ちりめんとのお会い — 森英恵のドレス

鮮やかな朱色の縮緬地に、色とりどりの大輪のダリアが勢いよく咲き誇る。生地から飛び出しそうなほどの大胆なその意匠は、洋花ではあるものの、どこか日本の菊花を感じさせる。和と洋が混在したような、不思議な佇まいだ。このドレスが制作されたのは1960年代半ば。戦後復興を経て、ようやく洋装文化があらゆる世代に浸透を始めた日本から、ファッション大国アメリカに向けて洋服をいち早く発信したデザイナー、森英恵の作だ。

その挑戦は彼女の苦々しい体験からスタートした。60年代初頭、既に国内では既製服と映画衣装で名を上げていた森は、初の渡米時にあるデパートの地階で「ワンダラー・ブラウス」という粗悪な服を目にした。安っぽい生地で作られたその品々は「メイド・イン・ジャパン」を売り文句にしていた。当時、日本製の服といえば廉価品の代名詞だったのだ。安物扱いの日本製品を品質で見返したい、日本には上質なものがづくり文化があるのだから。そんな熱い思いを胸に帰国した森は、精力的に日本各地の生地の産地を訪ね歩いた。そのなかで出会った素材のひとつが、滋賀県長浜市の縮緬だった。絹織物特有の高級な重厚感があり、光沢も美しく手触りがいい。「これだ！」と直感した。かくして、日本各地の伝統的な生地を用いた洋服を携え、森はアメリカ進出を果たす。65年1月のニューヨークでのショーは大成功を収め、『ヴォーグ (米)』誌は「East meets west (東洋と西洋の出会い)」と評した。日本製品の品質のアピールに成功した森は、それ以降も縮緬による作品をコレクションに度々登場させ、縮緬は森が得意とする素材のひとつとなった。



出荷前の製品。経糸と緯糸の加工の仕方で出来上がりのシボの太さや高さが大きく変わる



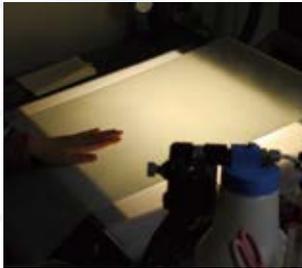
写真⑤「製織」の工程。経糸と緯糸を織機で織りあげていく



写真③「八丁撚糸」の工程。糸が切れないように水を掛けながら糸を撚っていく



写真①「ワク立て」の工程。これら数百のボビンから糸を集め、経糸を「整経」する。本写真は定番の「ワク立て」



写真⑥ 織り上がった生機（精練する前の生地）を検査する。見落としのないよう四度行っている



写真④ 八丁撚糸とカベ糸を合わせ、緯糸を作る「上撚り：合撚機」の工程



写真② 絹糸を熱水で煮る「緯煮き」の工程



(有)吉正織物工場社長、吉田和生さん

縮緬とは生地の表面に凹凸のシボがある絹織物の名称で、中国発祥といわれている。16世紀後半に堺の職工が明から技法を学び伝えたことを契機に京都西陣で生産が盛んになり、その後、全国に広がった。特に丹後、長浜、岐阜、新潟、福井、桐生、石川で発展し、各地の気候風土に根差した縮緬が織られた。このような幾つもの産地があるなかで、森が魅せられた長浜の縮緬とは一体どのようなものだろうか。五月初旬、西に琵琶湖、東に伊吹山を眺めながら、湖北に位置する長浜へと向かった。

浜ちりめん工場を訪ねて

長浜は羽柴秀吉が初めて城持ち大名となつて築いた城下町で、江戸時代には北国街道の宿場町として栄えた歴史ある街だ。また市街地周辺には姉川の合戦の地や浅井長政の居城、小谷城などの史跡が数多く点在する。人とモノが行きかったこの地において、縮緬の生産は1750年頃には始まっていたと伝わる。現在では高級着物の生地が製造の中心を占めている。長年、長浜市内で絹織物業を営んできた有限会社吉正織物工場を訪ね、吉田和生社長からお話を伺うことができた。「長浜の縮緬は『浜ちりめん』といって他の産地のものと区別されます。他の縮緬と比べますと、糸製作の段階で細かな工夫するのがこの特徴なんです。現在では、その工夫を活かしてシボや風合いが異なる30種類を超える浜ちりめんを作り出しています。また、糸製作から織りあげまで一社で一貫生産しているのも他の産地との違いですね。」縮緬の特徴である生地表面のシボは、撚りの無い、もしくは撚りが少ない経糸と、強い撚りをかけた緯糸を交差させて織り、緯糸が元に戻ろうとする力によって独特の凹凸を生じさせている。数多ある織物のなかでも、特殊な製法をもつ織

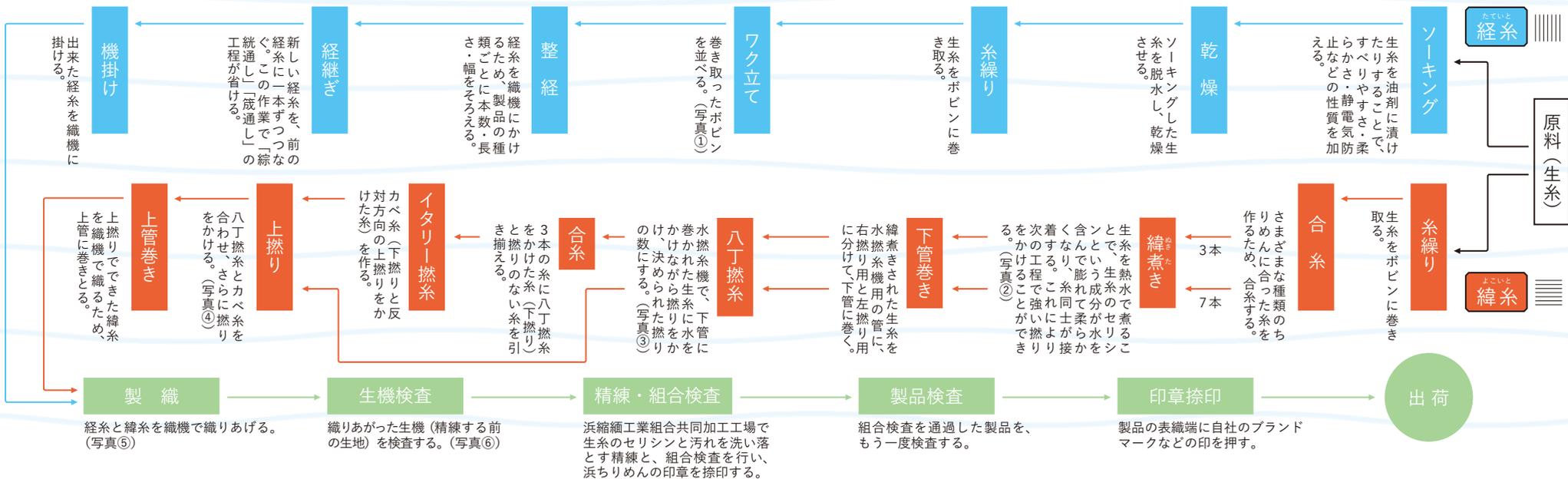
物のひとつだ。「浜ちりめんの製造には「糸練り」「整経」「撚糸」「製織」「精練」など、細かく分けると38もの工程があります。白生地になるまでは約2か月近くかかりますね。」と言いながら吉田さんが出来上がった生地を大事そうに手に取る。こうした複雑な工程と長い時間を要する縮緬の生産は、着物の出荷量がピークを迎えた1970年代前半を境に減少をはじめた。しかし、吉正織物工場では浜ちりめんを守ろうと、温湿度の変化に左右されない縮みにくい製品を開発するなど刷新を図ってきたのだという。「浜ちりめんは緯糸の製作に特徴があるんですけど、うちでは経糸にも他社にはない工夫を凝らしているんですよ。」まずは経糸製作場を見せてもらうことにした。

経糸と緯糸 — 交差する複雑な工程

糸が巻かれた無数のボビンが所狭しと足元に並ぶ。「これは「ワク立て」という工程です。夏向けの薄い浜ちりめん用にセットしています。何気なく置いているように見えるでしょうけど、これを編み出すのに2年間苦労しました。」経糸の本数や長さ、幅を整える「整経」が経糸製作の要となるが、その前作業にあたるこの「ワク立て」の組み合わせも生地の風合いを左右する重要な一工程になるという。料理でいうならば、出汁の配合といったところか。「他社も真似をしたがりますが、なかなか実現できないようですよ。」と、吉田さんの顔に自信の笑みがうかんだ。

次に案内されたのは浜ちりめんの持ち味を生み出す緯糸製作場だ。「緯糸に強い撚りをかけるための仕掛けがあちこちにあります。」そこは先ほどの経糸製作の乾燥した室内とは違い、作業場中のあちこちで豊富な水が音を立てて流れていた。「撚りをかける前に、まず糸自体を強くするため糸を煮て糸同士を接着させるんですよ。」吉田さ

*写真①～④ 写真提供：(有)吉正織物工場



んが大きな釜の蓋を開けて中を見せてくれた。もともと絹糸の表面にはセリシオンと呼ばれる成分があり、煮ることでそれが柔らかくなり接着しやすくなる。釜内の温度や時間調整のダイヤルを触りながら「浜ちりめんはね、セリシオンをいかに扱いか腕の見せ所なんです。仕上がりの良し悪しや個性が決まる大切な作業です。」と吉田さんの目の輝きが増す。この「緯煮き(ぬきたき)」と呼ばれる糸の煮方が独自のレシピらしい。そのほど良い頃合いは吉田さんの頭の中にある。そして、さらにその後には重要な糸撚りの工程がまっている。これは「八丁擦糸」といって、強く撚る糸が切れないようにちよろちよろと水を掛けながら撚っていく工程だ。何十本も並んだ管のうえに澄んだ水が流れる様が何とも美しい。伊吹山の地下水と琵琶湖の豊富な水が浜ちりめん作りを支えている。縮緬がこの地域に根付いた理由のひとつを知った。

1メートルあたり三〜四千回転もの強い撚りがかけられた糸は、さらに他の糸と合わされて撚糸になる。そしてカベ糸と呼ばれる糸を合わせ、再び撚りをかけるのだという。気の遠くなるような糸の加工が経糸、緯糸のそれぞれ全く別の工程で行われ、ようやく織機での製織工程へと移っていくことになる。「織り上がった後は、別の場所ですべて「精練」という作業をします。また絹糸にセリシオンが残っているの、アルカリ石鹼を溶かした軟水のお湯でぐつぐつ煮込んでそれを取り除くんです。そうすることで撚りが戻りシボが生まれて、生地はより滑らかになるんですよ。」吉田さんの手の中にある白生地は、琵琶湖の穏やかな水面のように細かなさざ波を立てながら艶々と光っていた。

高品質の浜ちりめんを守る

かつて縮緬製造で活況だった長浜の織物会社は今では数社に数を減らし、縮緬の出荷量も縮小した。それでも吉田さんは一貫生産にこだわり、14名の従業員とともに繊細な作業に勤しむ。「今年にはフランスのある有名なスカーフのブランドから浜ちりめんをぜひ使いたい、という依頼がありましてね。」近年では海外からの引き合いも多いという。18世紀初頭、縮緬の技法は中国から西洋に伝わり、クレールと呼ばれる上質な生地が織られてきた。しかし、日本の縮緬のようにシボが緻密で均質なものは今でも実現が難しいようだ。「日本の縮緬は上質です。そして国内の数ある産地のなかで、長浜は高品質なものだけに特化してきました。その確かな品質が海外からも評価されている所以なのでしょうね。」五十数年前、森が探し求めた高品質な生地は、この長浜で出会うべくして出会ったのだ。そしてその上質なものづくり文化は引き継がれ、今もなお「East meets West」の出会いは続いている。

取材文・筒井直子 写真・福嶋英城

取材にご協力頂いた企業・団体(敬称略)

有限会社 吉正織物工場

〒52610014 滋賀県長浜市口分田町629

TEL 074916211790

URL: <http://www.yoshimasa-orimono.jp/>

《参考文献》

・森英恵「グッドバイ バタフライ」文藝春秋 2010年

・島根県立石見美術館編「HANAE MORI HAUTE COUTURE 森英恵 仕事とスタイル」島根県立石見美術館 2015年

今日の補修室

TODAY'S RESTORATION ROOM

第 10 回

レプリカ(複製品)の製作①



今号より、
レプリカ製作について
ご紹介します!

今号から数回にわたり服飾品のレプリカ(複製品)製作についてご紹介していきます。初めて取り上げるのは、19世紀初頭の綿モスリン製ドレスのレプリカ製作です。

フォームを忠実に再現するため、まず実物のドレスからパターン(ドレス製作用設計図)をとります。パターンをとるには、生地地の目に沿って糸で方眼状のガイドを作ります。そしてドレスの各部分をメジャーで細かく採寸し、5分の1の縮尺でパターンを製図します。その後実物大に置き換え型紙を作ります。(※)

パターンをとったのちドレスを製作します。まずオリジナルがどのような素材でどのように縫われているかを詳しく調べ記録します。今回はレプリカの素材として、生地には白い綿ローンを使うことにしました。オリジナルのドレスには毛糸の刺繍糸が3色使われていましたが、ぴたりと色が合う市販の毛糸が見つからず、3色とも染色工場に染めていただきました。糸ができたなら、全て手縫いで刺繍を施していきます。

こうして製作したレプリカは、学芸員資格取得に必要な博物館実習などで教材として活用しています。(塩野美津恵)

(本品レプリカ製作担当:塩野美津恵・伊藤ゆか)

(※)本誌第6号「今日の補修室 第6回 パターンをとる」も合わせてご覧ください。KCI ホームページでPDF版をご覧ください。
www.kci.or.jp/publication/pdf/pr/fukuwomeguru_006.pdf



レプリカの元となった収蔵品

ドレス

1810年頃
京都服飾文化研究財団所蔵
小暮徹撮影

白の綿モスリンに毛糸の刺繍が施されたワンピース・ドレス。



レプリカ

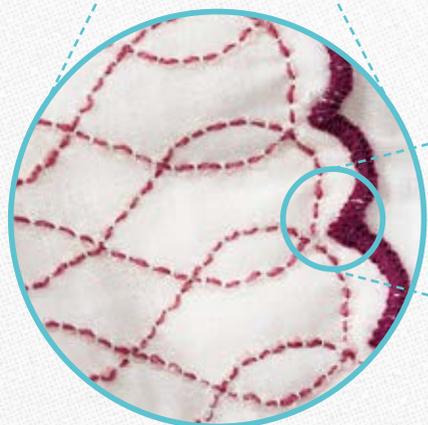
オリジナル



拡大



さらに拡大



濃い赤紫色

赤紫色

薄桃色

刺繍技法や刺繍糸の色も忠実に再現しました。



なぜこの作品を選ばれたのですか？

京都国立近代美術館で2016年に開催した「メアリー・カサット展」に、19世紀後半の真っ黒なドレスをKCIさんからお借りし、展示しました。あのドレスは喪ではなく、おしゃれとしての黒だと聞いて黒のもつ意味に興味を持ったんです。それに最近では、セクハラ問題に声をあげた「#MeToo」運動のなかで、ハリウッド女優たちが着た服が黒でしたよね。シャネルもきつというんな意味を黒に込めたんだらうと思い、この服を選びました。

シャネルの印象は？

自らの道を切り開いていく意志の強い女性、という印象です。そして新しい価値観を提示したアーティスト。1920年代にはバレエ・リュスの舞台衣装も手掛けていて、同時代の芸術家と積極的に交流して、彼らのエネルギーを自分の作風に取り込んでいくような。



この作品を美術史の視点から見るとどのように捉えられますか？

服の造型がシンプルで、キュビズムや構成主義を思い起こさせますね。幾何学的形態や抽象化といった1920年代のアール・デコとの影響関係がうかがえます。

もしこの作品を展示するとしたら、どのような展覧会をしてみたいですか？

黒に焦点をあてた展示とか。例えば、写真ではカラーよりもモノクロ写真の方が色を排除した分、抽象度が高まる。服でもそうだと思うんです。着ている人のパーソナリティとか小物などのコーディネートによって、黒の服はどんどん意味を変えていく。その部分をクローズアップさせる展覧会などは面白いかもしれません。

牧口さんならこれをどう着こなしたいですか？

シャネルの黒は万能で着る人の年齢を問わない服。個人的にジャケットやスーツは苦手なので、仕事上正装するときやパーティ、セレモニーなどの際に、なるべくシンプルに着てみたいです。

最後に40周年を迎えたKCIへコメントをお願いします。

40周年おめでとうございます。いよいよ来年はKCIさんと京都国立近代美術館の共催展がありますね。楽しく悩みつつ、一緒に準備を進めています。ぜひ面白いものにしましょう！

牧口千夏 Chinatsu Makiguchi

京都国立近代美術館主任研究員。主な企画・担当した展覧会に「映画をめぐる美術—マルセル・ブロータースから始める」(2013)、「オーダーメイド：それぞれの展覧会」(2016)、「キュレトリアル・スタディズ 12：泉／Fountain 1917-2017」(2017-18) (関連書籍「百年の《泉》—便器が芸術になるとき」が現在発売中)など。

KCI40周年特別企画

わたしが選ぶKCI名品

今年設立40周年を迎えたKCI。それを記念して、今号から3回にわたり、KCIとゆかりの深いキュレーターや研究者の方にKCI收藏品から「これぞ名品！」と思うものを一作品選出いただき、お話をうかがいます。第一回は、KCIと長年共催展を開催してきた京都国立近代美術館の主任研究員、牧口千夏さんにインタビューしました。



牧口さんが選んだ KCI名品

ガブリエル・シャネル

ドレス 1927年頃
京都服飾文化研究財団所蔵 高山崇撮影

第一次世界大戦(1914-18年)前から服飾品の製造販売を始めたガブリエル・シャネル[1883-1971]は、戦後、機能的で着心地のよい服を作り、社会的自立を求めた活動的な女性たちに広く支持された。その代名詞の一つといえるのが、簡潔なシルエットの膝丈の黒いドレス「ブチット・ローブ・ノワール(小さな黒い服)」だった。「ヴォーグ(米)」誌(1926年11月号)は、大量生産を本格化させたフォード車の黒の単一モデル自動車になぞらえて、「新時代の女性のユニフォーム」と評した。

展覧会開催

Kimono Refashioned

企画：サンフランシスコ・アジア美術館、公益財団法人京都服飾文化研究財団

この秋より、京都服飾文化研究財団（KCI）の新しい展覧会「Kimono Refashioned」が米国を巡ります。KCIは「モードのジャポニスム」展（1994年）でファッションのジャポニスムをとりあげ、「Future Beauty」展（2010年）で20世紀後期以降に日本人デザイナーが果たした革新的な役割を再確認しました。それらを踏まえ、19世紀末から現代まで、きものがファッションにどのような影響を与えたかを探ります。KCIコレクションを中心に、米国の美術館からきものや浮世絵も展示。ぜひご覧ください。

2018年10月13日～2019年1月6日

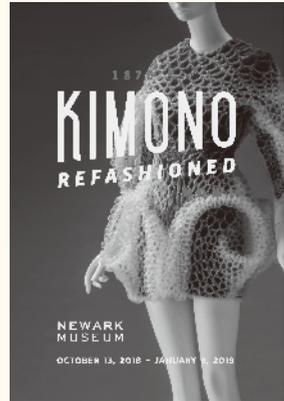
会場：ニューアーク美術館（ニュージャージー州）

2019年2月8日～5月5日

会場：サンフランシスコ・アジア美術館（カリフォルニア州）

2019年6月28日～9月15日

会場：シンシナティ美術館（オハイオ州）



KCI ギャラリー展示

「収蔵品紹介27：優雅な生活 18世紀ヨーロッパ貴族の装い」展

会期 | 2018年5月28日(月)～8月17日(金) (土・日・祝日休館)

開館時間 | 午前9時30分～午後5時 [入館は午後4時30分まで]

入場料 | 無料

京都服飾文化研究財団が所蔵する服飾コレクションを展示するKCIギャラリー。現在、「優雅な生活 18世紀ヨーロッパ貴族の装い」と題して、18世紀のヨーロッパ貴族の衣装をテーマとした小展を開催しています。本展では宮廷、私室、屋外での貴族の装いを展示し、優雅にして華麗な当時の貴族たちの生活を垣間見ます。衣装のみならず、扇や靴などのアクセサリー、当時の流行を映したファッションプレートなども展示。ぜひご覧ください。



服をめぐる

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第10号

2018年7月25日発行（年3回発行）

-

発行：公益財団法人 京都服飾文化研究財団（KCI）
〒600-8864 京都府京都市下京区七条御所内南町103
株式会社ワコール京都ビル内

電話：075-321-9221

ウェブサイト：<http://www.kci.or.jp/>

編集：筒井直子、福嶋英城、松坂雅子（京都服飾文化研究財団）

デザイン：坂田佐武郎、福川真由子（Neki inc.）

写真：成田舞（Neki inc.）、福嶋英城

編集後記

KCIは衣装などの服飾資料を約13000点収蔵しています。これらは「今日の補修室」（p.20-21）でご紹介するとおり、次世代へ引き継ぐ大切な遺産として徹底した管理を行っています。扱いに様々な制約があるこれらの収蔵品に対して、お客様からは「動く様子が見たい」「こんな場所に展示してほしい」など、面白そうではあるものの保存上お応え出来ない要望がときどき寄せられます。そんな非現実の世界を誌面で実現するため、今回は収蔵品を鳥にさせたイラストを新進気鋭のイラストレーター、Ryuto Miyakeさんに描いていただきました。美しいイラストと収蔵品のコラボレーションをぜひお楽しみください！